

講演

# 命の授業

制野俊弘さん

編集部

1月に新潟市で行われた制野俊弘（和光大学）さんの講演を、ご本人の諒承を得て編集部がまとめたものです。制野さんの「命の授業」はNHKスペシャルでも紹介されました。また『命と向き合う教室』（ポプラ社）としても出版されています。（編集部）

## はじめに

震災以降いろんなことをしてきました。一番なにが必要か、命の授業です。これは被災地だからできるとか被災地でないからできないということではない。子どもたちの命の危機というのはあちこちにあるからです。震災をきっかけに考え始めたこの問題が実はいろいろの子どものこころにささっている。たとえば、不

登校の子ども、ひきこもりの子ども、親の離婚をかかえる子ども、学級内でのいじめの問題、親から虐待を受けている問題など、抱えている子どもたちは自分も死にたいと思ったことがあるとか、なんで生きているのかと思ったとか、共感できる作文をたくさん書いてくれます。ということは命の授業、あるいは命にかかわる授業は震災があろうがなかろうが、被災地であろうがなかろうが、関係ないというふうには私は考えています。もし自分のクラスで困った子どもがいるとか生活する面で大変な子どもがいる場合にはぜひ手を差し伸べてほしいと思います。

地震と津波

私が勤めていた学校は東松島市内の野蒜海岸にある中学校です。鳴瀬川の河口にあり海岸から200メートルほどで2階から窓を開けると波の音が聞こえます。ほとんど平地で最大波高が10・35m、内陸5キロメートルくらいまで水が押し寄せ、市全体の面積の36%が浸水し、建物用地でいうと65%が被災しました。

震災当日、学校は卒業式で、午後はかんぼの宿で3年生の祝う会を開いていました。4階建てで階段あと1個半というところで津波が止まりました。学校に残っていた1、2学年の先生方の一人はPTSDのようになつて震災のことは一切語りません。その先生は死を覚悟したといえます。残っていたのはバスケットの部活動の8名ほどの生徒たちでした。みんなで一生懸命模造紙に「SOS」と書いて窓に貼つたそうです。

地震がおきたとき先生方は何をしたらか、実は我々マニュアルは何も知りませんでした。津波が来ることは想定していませんので、地震の訓練はたくさんやりましたが、津波の訓練まつたくやっていません。先生方が持つて逃げたもの、実は生きるのに必要なものだけです。指導要録・通知表はまつたく頭になかった。

学校に地域の人たちが逃げ込んできたとき、先生方

に何が求められたか。「この生活と健康を守るため」にどうしたか、保健室が野戦病院に変わります。保健の先生は医者でもあり保健師でもあり看護師でもあります。避難所になつたときに我々は、例えば地区割りをどうするのか、衛生係とかか食料係とか会議にできる班長とかかかり分担任なんかも生徒を合宿に連れていった時と全く同じです。それも先生たちがリーダーシップをとる、あるいは地域の人たちと一緒に、作戦を考える。

### 九死に一生を得る——K君の作文

3月11日ぼくはあんな日があるなんて信じられない。あの日、先輩方の卒業式で、午後1・T・U君と3人遊ぶ約束で我が家に招きました。お寺を建て替え、開眼法要をしたばかりの新築が津波をうけてしまったのです。午後2時頃T君と買いたものに出かけ、店に足を踏み入れた途端、がたがた揺れ、立つことができません。揺れが収まらず、吹雪中を大急ぎで走つて家へ戻りました。家の中は何から何まで落ちていて、とても片づけられる状態ではありません。両親への電話はつながらず身動きがとれませんでした。

その後、4人で高さ3〜4mの高台へ上り避難しました。まもなくT君の母親が迎えにきてT君とI君は帰りました。U君がおれも自転車で帰るからときりだしました。ぼくは帰っている途中で何かあつたらどうすると呼び止めました。これが正解でした。帰っている途中で何かあつたらどうするんだと呼び止めました。これが一つ正解なんですね。地震から津波くるまでちょうど1時間でした。1時間の間の出来事です。親切な男の人が寒いからと言って高台に置いてあつた車に入れてくれました。まもなく車の外に母の姿が見えました。僕のことを心配してくれた両親は、出かけ先の石巻から野蒜まで戻ってきてくれたのです。

しかし喜びもつかの間、海岸の方から少しずつ波が見え、そのときはまさかここまで来ないだろうと思っていました。次の瞬間目の前に波が押し寄せてきました。えっ、頭が真っ白というか真っ暗になりました。僕たちは津波から逃げるように走りました。運よく小屋が見つかり僕は間一髪そこに逃げ込みました。ただどじは波に流されてしまいました。僕たちの小屋のそばを「助けて、助けて」と叫びながら流れていく人たちがたくさんいました。小屋の中でおやじのこと

を尋ねると、母さんは「お父さんはKを家のなかにいるかどうかを確認しに家へ入っていたんだ」と暗い声で言いました。それを聞いた僕は言葉を失いました。

どんどん増していく水嵩は僕たちの首までに達し、小屋の屋根によじ登ろうとしましたが、濡れた服がとても重く寒さで手にも力が入りませんでした。ぼくの体はぶらさがった状態になり、次の瞬間手が離れてしまいました。その時は死んだと思いました。でも自分の生きたいという気持ちのほうが津波の力にまさりました。腕のび足がなんとかつき、九死に一生を得ました。どんどん波が引いていきました。助かった、何度も何度もその言葉が口からこぼれました。

僕たちは少し高い山に身をよせました。山の上から流されたUの名前を呼ぶと「助けて」と叫ぶ声が聞こえました。生きていた。そうつぶやくと僕はなんだか気持ちが悪くなりました。あのとき帰るなど言わなかったらどうなっていたかと思いました。

### U君の行動は（作文から）

ひざまで水がきた段階で立てなくなつて、ごろごろと草むらをころがされて川に落ちたそうです。川に落

ちて流されていった。本人は泳ぎ得意じゃないので一生懸命もがいていたようですが、瓦礫がじゃまでなかなか浮けなかった。瓦礫のないところまで潜ろうといっただん潜った。潜って浮いたところにちょうど古タイヤが流れてきてそれにつかまって助かった。流されていくとき、おばあさんたちに海岸の方にいっちゃだめだと言われて、彼は一生懸命泳いで岸にたどり着き何とか助かった。そこにちょうど山の上からK君がさげんだ。お互いに叫んだので助かった。(壮絶な出来事です。制野)

次の日、大人の人に手伝ってくれと頼まれた場所に僕の父親の車がありました。もしかしたらと僕は思いましたが、しかし中には別人が乗っていました。残念な気持ちになりましたが、とにかくその人たちを助けようと思いました。父のものが人を救ったんだと前向きに考えるようにしました。

### 避難生活のなかで一番気にかけたこと

我々の学校での避難生活はだいたい3カ月くらい続いた。避難生活の中で私たちが一番気にしたのは子どもたちのことでした。子どもたちが毎日体育館に段ポ-

ルで作った家みたいところで生活をしながら学校に来る。それで子どもたちの精神状態がどうなのかすごく気にかかっていました。毎日のように健康観察をしていたのですが、やっぱり気になってどうしてもそこに目をやらざるをえないのです。

ある子どもはげっそり痩せていくのです。女の子だったのですけれども。お母さんを亡くしてしまってもう先が見えないって非常に苦しそうにしているのです。それから髪の毛が抜け始めたという子も出てきました。それから言葉がでてこなかったという子ども、実際出てきました。一番我々が危惧していたのは元氣よくしている子どもたちだったのです。親が亡くなったり、それから弟が亡くなったりしている子どもたちでもすごく元氣よくしている、それが一番心配な子どもたちでした。

### 運動会をやった

当時は運動会をやるうなんて、誰も思っていなかった。隣の中学校に間借りしていましたから。私はやらなければと思っていた。なぜなら地域の人が集まって、生きていることをお互いに確認しあう地域が離散状態で

すから。子どもたちは、30近い避難所に散らばっている状態でした。

地域の回復なら、生徒も教師も楽しめるしかけを作る、それが運動会です。写真に見るように馬に乗って入場した。地区は馬を飼っている家が多く、運動会で見せたら喜ぶという発想です。震災で馬はいない。それで仙台の乗馬クラブから借りてきた。黒いシャツ着た人は、この学校のOBで、「おふくろを亡くした」と言っていました。

それから聖火リレーは、マッチやライターを使わず、火起こしからスタートする。地域には縄文遺跡がありその施設もあります。ちなみにこの火おこしに挑戦の子は弟を亡くしている。この子がこうやって火を点ける。なかなか点かない。時間もかかったが、なんとか点いた。正面に眼鏡をかけて白い服の女性は校長先生で、その背後に座っているのが私です。

実は1回目、火が点かず、2回目でやっと点いた。受け取る校長先生が顔をあげられない。トーチをかざした瞬間、それまでのいろんな思いが胸にきたのでしよう。

リレーの人たちは、地域の避難所とかで一生涯懸命

張ってくれた人たちが子どもたちが選んで、お願いをして走ってもらう。地域の人たちは、わかるわけです。あの避難所で頑張っていた人だと。リレーをやって生徒会長K君が最後に火をつけた。

エジプト・ダンスという変わった踊りの伝統があり、やりました。R君は、勉強はいいっさいせずに3時ころ部活をやって帰っていく。この踊りのときは学校に来るのです。不思議な生徒です。彼は来しました。

リレーをやって最後に紙飛行機をとばした。この写真は2年目の運動会、やっぱり火おこしから始めました。この時は廃校統合が決まった年なので、卒業生につないでもらおうと、私が提案して1回生、2回生も来てリレーすることになりました。

最後にまた火をおこす。騎馬戦、棒倒しとむかで競争、お父さんたちが足のひもをつけて入場する時、すでに切れてしまったが、代えない、「エアむかで」です。

これはこの年にやったのですが、三本の綱を一本に編むイベントです。プログラムにいれこみました。いろんな意味を込めました。綱をあんて三つ編みにしていくのですが、これを午後のお神輿をひくところに使

おうと思った。これは津波にながされてぎりぎり助かったお神輿です。青さびが浮いていた。地域の人たちが一生懸命直してくれて運動会の日運んできてくれた。それをみんなで引こうと考えた。10人くらいでとにかく全校生徒にひかせたいと思ったので午前中に編んだ綱を引き綱にして神輿につないだ。この綱を全校生徒で引つ張るといふふうにした。これも私の勉強不足だったのですが、神輿をかつぐときには天狗が露払いで歩く。さらに塩をまき道を清め、神輿が通るのが地域のお祭りの習わしだったので。すべて地域の人が、用意してくれました。津波に飲みこまれた神輿ですが、奇跡的に残った。10台くらいあったのが2台くらいしかなかった。

最後にボランティアの人たちに手伝ってもらいながら、風船をあげたのです。この風船をみたときの感想文を紹介します。手放した瞬間にきれいにあがっていった。青い空に同じ方向に昇って鳴瀬川の上流の方に向かってこの風船がいつせいに、だあーと流れていく。会場はシーンとなる。この写真の子もにこにこ笑っていますけど、この子は目の前でお祖父さんとお祖母さんを亡くした子どもです。天井まで10cmのところ

助かったそうです。そこで息していたと、言っていました。

このときに書かれた作文が次です。M君という子の作文です。子どもたちの作文で、私が大事にしていることは本音が綴られているかどうかを見ます。本音とは何なのかというと、「日本作文の会」では議論になるところですが、作文というのとはともあるわけはありませんから、心の叫びみたいなものとか、あるいはちよつとひつかかる一言だとか、そういうところに注意を払っているのです。Mという女の子は運動会直後の作文はこう書いてきたのです。

私はなかなか風船を手放すことができなかったのですが、みんなから遅れて風船を放しました。風船にはいろいろな願いをこめました。

### この作文から見えること

普通であれば、いろんな思いが籠っているのだから放せなかったのだなで終わる。だけど離れなかったというのがとても気になっていたので。ふつう願いを込めるのだったら放せばいいわけです。ところがこの子は放せなかったと書いてきた。

だから私はそれがずっと気になっていて、どうしようかなとずっと思っていた。実はこの子はお母さんを津波で亡くしているのです。亡くなったときの状況は、お母さんが介護施設で働いていて、人々の手を引きながら逃げていたというのが最期の目撃証言。それを私は知っていましたから、この子はおそらくいろんな思いを抱えていただろうという思いはあった。先にお話ししたようにすごく頑張り屋です。だから心配したのです。私はこの子はつぶれるのではないかと思っています。前向きで、悲しさを出さず、にこにこしながら生徒会活動をやったり部活動をやったり運動会をやったりする。

風船が手放せなかつた作文は、3年生の時、2年生の時は次の通りです。

みんな一人ひとりいろんな思いを込めて紙飛行機を飛ばした。同じ白い紙だったけれどもどれも自分色になっていったと思います。

これにもひっかかっていた。自分色って何色だと思っ  
て、ずっとひっかかかっていて、でもきけなかつたので

す。当時は、大丈夫とかほんとはもつと言いたいことあるの、と聞けなかつた。だが、次の年、やっぱり風船を飛ばして手放せませんでしたと書いてきたので、この子の本音をきちんと聞いてみようともう一度書いてもらったのがこの作文です。

#### M君の作文

あの震災から一年以上が過ぎました。

今思えば震災について本気で考えたことがありません。

いつもどこかに綺麗事をまじえて考えていたような気がします。

私たち3年生にとっても中学校としても最後の運動会の日、最後の企画で風船を大空に飛ばしたとき、涙が溢れてきました。

風船には未来の願い、辛さや悔しさ、様々な思いを込めました。

風船を飛ばすことで願いが叶えばいい、辛さや悔しさが無くなればいい、そう考えていました。

けれど、なかなか風船を放し空へ飛ばすことができませんでした。理由はわからなかつたけれど、今考え

るとわかるような気がします。私は大好きな母を忘れそうになっています。忘れたくない、そう思っているのに少しずつ消えてしまいます。

震災が起きる朝に交わした言葉も、声も顔も動作も。

思い出せないことが多くなっています。

それがとても怖いんです。母が私の中から消えそうです。そして忘れていってしまう自分が嫌でしようがありません。風船をなかなか飛ばせなかったのも「忘れてしまう」と思ったからだと思います。

この子にしてみれば風船飛ばしは、ただのイベントではなかった。心の中で母を忘れる怖さと戦っているところまでは我々はわからなかったです。普通に考えれば時間がたてば心癒えるだろうとか、何かが癒やしてくれるだろうと思うですけれども、まったく逆で、この子は記憶がなくなるのを怖がっているのです。

### 文はまだ続きます

大好きな人が死んでしまう私にとつてそれは非現実的なものです。正直、母は死んでいないと思っ

す。

いつかひよっこり現れて、何事もなかったかのようにいつも通りの生活に戻る。私の名前を呼んで、他愛もない会話をしたり、私の成長を見て笑ったり泣いたりしてくれる。こんなことを考えてもどうしようもないと思います。私はそういつた普通の幸せに夢を見て、いつか叶うと信じているのです。そう思わなければ、いつか自分が不安や悲しみで押し潰されそうになる気がします。

だからがんばるのです。忘れないように、その不安をかき消すかのようにがんばる。だから悲しい頑張りで、これが私たちがここ5年間ずっとかかえている一番の悩みです。さらに文はつづく、

### 進路説明会で

この間、3年生にとつて大切な進路説明会がありました。私は進路説明会があるというお知らせを父や祖母に渡せませんでした。父は仕事だと知っていましたし、祖母は学校に来るのが大変でしょう。一番後ろの席に座り、私だけでも大丈夫と思っていました。けれ



ど、みんな親がきて隣に座る。それを見た瞬間、少しだけ泣いてしまいました。

この少しだけというところが今でもひっかかる。この子は後から何回も少しだけと書いてきます。少しだけ、少しだけ。これが頑張ってる証拠なんです。少しだけ泣いてしまいました。まわりに気を使っているのもあるし、崩れていく自分というのはおそろしいのだと思う。でもそれは支えてくれるという人がいない。ちは表にだせない。

担任の先生に「このこと知ってた」、と聞きました。知らなかったそうです。うしろにポツンと座って、家の人のがきでないなというのは多分わかると思う。進路説明会、3年生の受験の説明会ですから、すごく大事な説明会、そのお知らせすらも家の人に渡してないというの、担任は知らなかったと言っていました。そして、

それだけで泣いてしまう自分が情けなくて、母がないことを改めて実感させられたような気がしてとても悲しかったです。母に会いたい気持ちが溢れてきま

す。自分の嫌なところやダメなところがどんどん見えてきます。人に頼りたいけど、そうすると相手が困ってしまうから相談できない。そう自分に言い聞かせていますが、本当はただ自分が相談したくないと思っていて。母を想う気持ちは私だけのものであり、それをほかの人に言いたくないのです。こんな矛盾に嫌気がさします。

そして辛いことや悲しいことがあっても大半は誰にも相談しないで自分の中に詰め込みます。小さい頃から相談するのが下手でした。だから、自分のなかに留めることに慣れてしまい、それが私にとって普通なのです。

よく友人に「無理するな」だとか「背負い込み過ぎなんだよ」と言われます。そんな優しさに泣きそうになります。この頃、少しずつですが人に慣れるようになったような気がします。今ならあまり相談することのできなかつた母にも頼れる気がします。けど、もう近くにいないから母親のいる家庭が少しだけですが羨ましいです。

ここも出てきます。少しだけ。うんと羨ましいと言

わない、我慢しているから。少しだけ羨ましい、と。

去年の運動会も、今年の運動会でも、精一杯頑張りました。けれど、いつも最後にはぼんやりした何かが残ります。一生懸命練習してきたことが一日で終わってしまふ寂しさかと思っていました。たぶん、そういう寂しさもあります。でも、もしかしたら母親がいなからどこか心にぽっかりと穴があるのかもしれない。母と一緒に喜びたい、褒められたい、そんな願いがあったのかもしれない。

そんなことを言ったら母に怒られるでしょうけど、これが私の本音です。けれど以前母に、「生きている人を大切にしろさい」と言われました。母が大好きで、死んでしまったことをまだ理解できなくて、不安で怖くて、そんな思いでいつぱいでしたが、私には母だけではないのです。心配してくれる人や笑い合ってくれる友人、慕ってくれる後輩。全てのひとが大切で、私を支えてくれています。

## M君の心のことば

このお母さんが生きている人を大切にしろさいと、

そういったのか私は、確認していません。本人が、もしかしたら頭のなかで作ったお母さんの言葉かもしれない。これはわかりません。でも死んでしまったと、繰り返すのです。これくらい矛盾に満ちた文章はないと思います。

まとめは、次のとおり、

信じていても生き返ることはないし、母を忘れてしまふ恐怖感はまだまだあります。けれど、その気持ち私が私にとつて前に進むための理由になります。いつか会えると思っている。これが前に進むための理由になる。これから大切な仲間とともにたくさんのことを体験し、自然と涙が溢れる、心に残る思い出しにしていきたいです。そして、母に会ったら自慢して、一緒に笑い合いたいです。(2012年12月19日)

## まとめにかえて

お母さんが亡くなつてから2年近くたつての作文です。この作文を読んだときにここに3つあげられていますけれども、①子どもたちは心の傷を抱えながら、必死に乗り越えようとしている。②子どもの「本音」

に寄り添うことの難しさ。③教師にとっても子どもにとっても、綴ることは「生きる」ことである。もし私が風船を飛ばすのをみんなから遅れて飛ばしましたというところに、ひっかからなければこの作文は出てこない。だから子どもの本音に寄り添うというのは、こちらが子どものことをよく見て観察して、よく聞いていないと出てこない。そうしないと本音に寄り添うことが出来ないです。これは教師にとつて難しいところですよ。いまの教育状況のなかでなんとかしたい。子どもの本音にきちっと寄り添える教師であるためにはいろいろな訓練をして、五感を研ぎ澄まさねばならないし、それから私体育教師ですけれども「作文の会」へ行つて、子どもの見方を勉強するとか、「日生連」にも、「全生研」にも行きます。「日本作文の会」にはよく行つて勉強させてもらう。そういう実践に取り組んで自分ものにしなからやらないと無理だと思います。「体育同志会」のサークルで体育の研究しているのですが、そこでも作文はずつとやっている。同志会のなかでは異端児です。むずかしいですけれどもこどもの本音に寄り添う、これは教師に課せられた使命ですから、これをやらないと教育をやったということにならないの

ではないかと私は思う。教師にとつても子どもにとつても綴ることは生きること。いろいろ書きましたけれども、M君には「お母さんが生きているということ、あなたのDNAに残っているのではないか、あなたのやさしさはお母さんそのものだよ。だからだいじょうぶだよ」と書きました。本人はちよつとだけ安心したと言っていました。

(文責・内山・吉田)